

Viva Savoia!!

ペニーボイス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界がアズールレーンとレッドアクシスに別れる少し前：

人類全体が団結した結果、セイレーンとの戦いは人類優勢で推移していた。

しかし優勢は平和への期待とは裏腹に各国勢力の利害の対立を招く。

大陸での”生存圏”を渴望する重桜と鉄血、大洋支配と大陸市場を獲得したいユニオン、セイレーンに侵食された影響力を取り戻したいロイヤル、そして”我らが海”での復活を狙うサディア帝国。

サディア帰りの重桜海軍所属の指揮官、カツラギ中佐は重桜国内での『統帥派』と『皇室派』の派閥争いに関与し始める。

ただし憂国ではなく、自己利益のために…

目次

	I	
プロローグ：ランチ	1	
ジュゼツペ	12	
副業	24	
中立地帯	36	
若気の至り	46	
内憂外患	60	

プロローグ：ランチ

重桜

鮮やかなサディア帝国旗を掲げるカフェテリアの前では、1組の夫婦が軽食を摂っている。

夫の目の前にはラザニアとカプチーノ、妻の目の前にはナポリタンとエスプレッソが置かれていたが、両者は共に食事を途中で切り上げていた。

その理由は妻の顔を見れば一目瞭然だろう。

国旗と同じくらい鮮やかな茶髪をした彼女は、この食事自体が苦悶というような表情

をしているが、それは向かい合わせに座る夫に不満があるからではない。

夫の方も彼女の意図を汲み取ったようで、盛大にため息を吐く。

ラザニアの傍に投げたフォークを再び取り上げるでもなく、夫はその更に傍にあるカプチーノを手を伸ばして一口含んでみせた。

夫にとつても香りさえ薄く感じられるそのコーヒーに対する評価は限りなくゼロに近い。

だから妻の不満も重々承知している。

「そう怒るな、ザラ。何もデザートのためにこんな店を選んだんじゃない。」

「あら！それはよかったわ。これがあなたのセンスなら、私はあなたとの関係を考え直さなければならなかった。」

「こんな店は君んとこから国旗を借りてるだけさ。次いでに内装に金を注ぎ込んで、商品自体への投資がおざなりになった…そんなところだろう。」

「料理もコーヒーも最悪！」

「そんなモノ頼むからだ。そいつはスパゲティなんかじゃないと言っただろう。」

「あなたのラザニアはどうなの？」

「冷凍パイシートに薄めた牛乳とレトルトのミートソースを加えたような感じかな…パ

イ生地は半解凍だ。」

「ほらね、人のこと言えた義理じゃないでしょう?」

「確かに。だが、来週にはきつとチツタ・エテナールでコトレッタでも頼張ってる。さつきも言ったように、ここにはデートで来たわけじゃないんだから。その楽しみは取っておいてくれ。」

夫の方はグレーのスーツ、妻の方も白のそれを着込んでいた。

遠目から見ると限り2人はせつかくの休日にランチ選ぴを失敗した可哀想な夫婦に見えるはずだ。

たしかに大方間違つてはいないが、この感想には一つだけ誤りがある。

この夫婦はランチ選ぴを失敗したわけではなく、失敗すると分かつていてこの店に入ったのだ。

カフェテリアに向かい合つて座っていた夫婦のうち1人が、妻のずっと奥にある建物の前に一台の高級車が止まったのを見て取つた。

夫はカプチーノをテーブルに置いて、会話を切り上げる。

「……この仕事に失敗したら」叔母様にとびきりドヤされる。チツタ・エテナールの一

流店に行つてもランチを楽しめないよ。」

「はあ……そうね。なら、さっさと片付けましょう。」

夫に続いて妻もナポリタンの殆どとエスプレッソの半分を置き去りにして席を立つ。目的の人物の近くに高級車が停まつたつて、夫が急ぐ理由にはならなかつた。

あの男は迎えに来る運転手を充分以上に待たせるのが趣味なのだ。

それに、この計画は極めて周到に仕組まれている。

夫の方が勘定を持ち、慌てることなく料金を支払つた。

ふとレジ係の背後にある店名が目に残まる。

”ボルケーノ”

この料金設定ではゴードン・ラムゼイでも来ない限り、半年後にはこの店の経営が噴火口になることだろう。

そんな事を考えながら夫は妻と共に店を出て、車を停め置いた立体駐車場へと向かう。

休日の陽気な午後を無駄に費やしたと言わんばかりの態度で駐車場に入ると、自分達の車を見つけて悠然と乗り込んだ。

妻は運転席に、夫は助手席に座り込んだが、それと同時に夫は軍隊式の着替え術で

もってあつという間にスーツを脱ぎ、後部座席にあつたバッグの中から黒のパーカーにグレーのジーンズ、古びたスニーカーに医療用ゴム手袋と黒のスカーフといった品々を取り出して身につけた。

” 巨人軍 ” の野球帽を目深に被り、バッグの奥にあつた38口径の ” アンダーカバー ” 回転式拳銃を取り出してポケットに入れる。

最後に野球帽の上からフードを被ると、妻が駐車場から車を発進させた。

” ヴィクター ” 、 ” ヴィクター ” 、こちら ” チャーリー ” 、発進するわ。」

『了解、 ” チャーリー ” 。 ” ゴルフ ” は未だ確認できず』

妻の方がハンドルを操作するのは逆の手で、無線機を使ってそんなやり取りをする。

夫婦の車は赤のSUVで、左右のサイドウィンドウはスモークガラスだった。

車は幾つかの交差点を経由しながらとある路地へと至る。

そこが彼らの待機地点で、高級車が普段向かうコースの途上に面していた。

『 ” チャーリー ” 、 ” チャーリー ” 、こちら ” ヴィクター ” 。 ” ゴルフ ” が乗り込んだ

わ。準備をして。』

「チャーリー」了解。」

「ヴィクター」、ヤツに準備させておけ。」

『言われなくてもやつてるわ、チャーリー』

「それは結構。」

夫は首に巻いていたスカーフを鼻の上まで引き上げた。

あの野郎はちゃんと自分の仕事をするだろうか？

そんな疑念を抱いてはいたが、ヤツには大きな弱点があり我々はそれを握っている。

まもなく杞憂となる心配事を夫がしていると、視界の端にあの高級車が現れた。

安全な速度で、いつも通りに走行している。

ところが、突如としてその真正面に巨大なゴミ収集車が現れた。

高級車は突然現れた巨大な障害物を避けようとするが、もはや手遅れ。

高級車とゴミ収集車は正面衝突を起こし、高級車の運転手はつんのめったように倒れてクラクションを派手に長く鳴らし続ける。

鳴り響くクラクションの中、夫は助手席から降りて落ち着いた足取りで高級車へと向かう。

周囲には少なくない通行人もいたが、それも彼にとつては計算の内だ。

高級車の後部座席には2人の海軍高官が乗っていて、その内の1人が早くも衝突の衝撃から立ち直っている。

夫から見て手前側の高官が後部座席から転がり落ちるようになり、衝突の際顔面をぶつけて真つ赤になった顔を夫の方に向けながらよろけた足取りで向かってきた。

夫は躊躇う事なく、ポケットからちっぽけな回転式拳銃を取り出すと至近距離で引き金を引く。

弾道性の良い38口径弾が血まみれの顔面を叩き割り、高官は今降りてきたばかりの高級車に後ろ向きに倒れ込んだ。

次いで夫は後部座席に誰も乗っていない事を確認すると、既に反対側のドアから降車して路上をはい進んでいる男の方へ向かった。

男はまだよく状況がわからないようだったが、しかし、見るからに不審で38口径拳銃を持った男のことを救助に来た人間だと考えないだけの分析能力は持っている。

不審者がゆっくりとした足取りで彼の下に向かい、やがてその脚に鉛玉を一発打ち込むと、男は叫び声を上げて仰向けになった。

「くそっ！くそっ！貴様何者だ！…私が誰だか分かってるのか！」

「んん、ああ。重桜海軍部の長官、要するに海軍統帥派の首領だな。」

「貴様、皇室派か!?こんな事をしてただで…」

「天誅！」

夫は男の顔面に銃弾を打ち込むと、今度は高級車の運転席に向かう。

未だにクラクションを鳴らし続ける運転手を確認すると、念のためにその側頭部にも一発撃ち込んだ。

次いで正面衝突を敢行したゴミ収集車に目を向ける。

そちらの運転手は視線を感じるなり慌てて運転席を降り、男の下まで走ってきた。

「なあ！なあ、アンタ！アンタが依頼主だろ？」

「……」

「(トク)に長くはいられない！報酬を…」

夫は何も言わずにゴミ収集車の運転手の顔面にも38口径弾を撃ち込んだ。

弾切れになった“アンダーカバー”をその場に捨て、来た時と同じようにゆっくりと

歩き出す。

しかし乗ってきたSUVの方へは向かわず、別の路地へと入り込み、複雑に進路変更を繰り返した。

その間にパーカーや帽子やスカーフを脱ぎ、一つの塊にする。

パーカーの下に来ていたシャツが現れた頃、複雑な進路変更を繰り返していた夫を路地裏で待っている一両のセダンを見つけた。

夫は何の躊躇いもなくその車に近づくと、何も言うことなく助手席に乗り込む。

「お疲れ様、指揮官。それとも”チャーリー”と呼んだ方がいい？」

「とつとつと出発しよう、ポーラ。」

ヴァイオレットの豊かな髪をした女がセダンを発車させる。

仕事は終わり、それもつつがなく終わったのだ。

なら向かう場所とは言わずとも分かっている。

”家に帰る”のだ。

セダンが走行する間に夫は履いている靴とジーンズも脱いでパーカーと共に一纏めにする。

「…………ザラは怒つてたわよ？あんな店のランチなんて二度とごめんだつて。」

「サディア人は美味しい物に金を惜しまないからな…帰ったら謝ろう。でも仕事は無事に終わったんだ。」叔母様も喜んでくださるさ。」

「こんな事言うのもアレだけど、ザラが怒つてたのはランチに關してだけじゃないと思うわ。…この仕事は私たちで十分にやれた。それとも、私たちの実力を信じていないのかしら？」

「君らのことは信用してるし、信頼もしてる。でも君んとこの国の偉い人が昔言つてたはずだろう。」大切な事は人任せにするな」つて。」

「コレが大切なこと？」

「ああ。」叔母様の考えもわかる…少なくとも分かるつもりではいるさ。」

セダンが橋の上に差し掛かると、海軍部長官を殺害した男は衣類一式をサイドウィンドウから投げ捨てた。

川の流れは早く、衣類の塊といえど今日中には海の果てへと流されることだろう。

これは推測ではなく、既に試験済みの事項だった。

「何にせよ、」 叔母様には来週ご挨拶に伺わないと。その時は留守番をしっかりと頼むよ。」

ジュゼツペ

サディア帝国

南部

海軍基地内

如何なる人間であれ、20代の体型を48歳まで維持する事は極めて困難だろう。日々運動能力は落ちていき、多くの場合運動時間も確保できず、基礎代謝は下降線を辿っていく。

少なくとも今年で48歳のサディア帝国海軍大佐ジュゼッペ・パレンティにとつては、それは拷問に近い困難であった。

彼は今秘書艦たるジュリオ・チエザーレと共に自らが司令を務める海軍基地の沿岸沿いを走っている。

かつて地元の高校のラグビーチームに所属していたジュゼッペにとつて、若い頃は6kmなんてものは距離ではなかった。

それが今は万里の長城かなにかのように思えるのだから、時の流れとはなんと残酷な事だろう。

若い頃は年に一度の体力検定をより早く終わらせるために走っていたというのに、今では年々増える体重を抑制するために汗を流している。

この習慣を18歳で軍隊に入った時から続けているおかげで、何にでも大量のチーズを載せないと気が済まないサディアの食文化と格闘しても「少々打ち負ける」程度で済んでいた。

彼と同年代の人間に比べれば、ジュゼッペはまだ「精悍」という名称の及第点くらいはもらえるはずだった。

ただし、同じ習慣を30年も続けることに関しては、多くの人々は敬意を持つ事だろ

う。

現にジュゼツペ・パレンティはこの基地にいる軍人の誰からも敬意を得ていたが、30年に渡るランニングはその一端を担っていた。

「ほら。もう少しよ、指揮官。このままのペースを維持しましょう。」

年々老いる彼は数年前に、この習慣を尚も続けるための大きな支援を得た。

秘書艦として赴任したチエザーレは長身の美女で、歳をとるに連れて折れかけていたジュゼツペの闘志を何度補佐してくれたか分からない。

もつとも、この美しい秘書艦がもたらした弊害もある。

強い日差しを浴びて肌を浅黒く焼き、ガツチリとした体型の、少し腹の出た禿頭の男がスタイルの良い秘書艦といるのだから、後ろ暗い噂は跡を立たなかった。

真実に関して述べるなら、ジュゼツペに対する風評は全くの根拠のないものだ。

彼は所謂7つの大罪の内、自らが犯したのは『暴食』の罪だけだという自負がある。

それにジュゼツペには愛してやまない妻と2人の子供がいたし、彼女はKANSENではなかった。

ジュゼツペ・パレンティがようやく日課のランニングを終えてスポーツ飲料水に口をつけている頃、司令部の方からチェザーレとは対照的に背の低いKANSENがやってくる。

「指揮官、鍛錬を終えた直後で申し訳ないがヴェネトから連絡があつた。こつちに来るそうだ。」

小柄なカブールはチェザーレの姉であるが、ジュゼツペには本当に姉妹か疑いたくなる時がある。

性格も体格も正反対な2人であつたが、ジュゼツペは2人とも大切に思つていた。

しかしカブールが要件を伝えた時、ジュゼツペの日に焼けた顔が皺を寄せて明らかに聳められたのは隠しようのない事実だつたが。

「…ヴィットリオ・ヴェネトが…？…いつ？」

「実を言ふとだな、指揮官。もう間も無く…」

カブールがそこまで言つたところで、ジュゼツペの耳にアグスタAW109ヘリコプ

ターのローター音が聞こえてきた。

優美なヘリコプターは遠慮を知らずに司令部へとまっすぐ向かい、やがてはその屋上にあるヘリポートに着陸する。

その様子を見たジュゼッペは、皺くちやな顔を更に皺くちやにした。

「…まったく、海軍の首領が聞いて呆れる！」

ジュゼッペは怒ったものの、結局のところすぐにシャワーを浴びて服装を正してから
ヴィットリオ・ヴェネトとの対談に臨んだ。

事前連絡に十分な時間を取れなかったところを見るに、ヴェネトはあまり待たされた
くないに違いない。

しかし、ジュゼッペにも急ぐつもりはなかった。

理由はなんであれ連絡が遅れる方が悪い。

責め苦を受け付けるつもりもなかった。

彼は十分に準備をするとようやくヴェネトとの対面に臨む。

部屋に入るなり向けられたヴェネトの視線が彼女の意思を物語っていた。

”待たせすぎです”

ジュゼッペは汲み取った相手の意思を傍によけ、改めて要件を尋ねることにした。

「本日はどのようなご用件で？」

「ジュゼッペ、私たちの諜報資産が重桜で仕事をこなしました。次は私たちの番です。」

「……………」と、いうことは元老院連中の懐柔には失敗したんですね？」

ジュゼッペ・パレンティはただただこの歳になるまで息を吸ったり吐いたりしていたわけではない。

自分の推測がヴェネトの凶星であった事などすぐに分かる。

ただし、それを知ってのんびり構えていられるわけではないことも承知していたが。

「…残念ながらあなたの言う通りです。元老院も皇帝陛下も、現状の権限を守るための自衛に手一杯になっていますから…」

「共産主義か無政府主義を受け入れるくらいなら、全体主義者に議席を与えた方がい

い。」

「ええ。私なりに頑張つてはみましたけれど……」

「なるほど。あなたの仰つていた“プラン”を発動するタイミングが来たわけだ。このままだと全体主義者のせいで国全体がミキサ―に放り込まれる。」

「……………ジュゼツペ、あなたの私感で構いません。率直に、私たちがロイヤルやアイリスとの衝突に耐えられるかどうか……どう思われますか？」

48歳の海軍大佐はヴェネトの質問に言葉を詰まらせる。

本気で言っているのだろうか。

海軍に30年間もいれば嫌でも分かるし、仮に外にいたつて察しくらいは着くはずだろう。

或いは、連中は宣戦布告の意味を知らないのだろうか？

全体主義者は正気とは思えないし、それに権限を渡そうとする元老院も全員銃殺すべき連中だ。

きつと表情がジュゼツペの返事を代弁していたし、ヴェネトにはそれを察する能力がある。

「私たちもあなたと同じ考えです。リットリオは『我らの海』での威光さえ陰りを見せることになるだろうと踏んでいる。」

「間違いありません。この国は戦争なんてできる状態にない。」

「この無謀な選択を止めるためには、あなたの協力が不可欠なのです。」

ヴェネトが来ると聞いた時から、ジュゼッペはなんとなくその目的を察していた。

以前から“プラン”の話は共有されていたのだ。

ただしいざそれに取り組むとなると、ジュゼッペには躊躇をしたくなるものがある。

「…本当に」私の友人達と連絡を取るおつもりですか？あなたは引き返せなくなりま
すよ？」

「カプールもチェザーレも、我がサディアにとつては切り札と言える存在です。それをあなたに任せているのには理由がある。こういう言い方するのは失礼ですが、あなたほどの経歴の人間は他にもいますから。」

「はいはい、承知してますよ。ただ私はあなた自身の良心について警告を差し上げたいだけです。これから我々がやろうとしているのは、無垢な人間を後ろから散弾銃で狙い撃つようなものだ。後悔だけはなさらないように。」

「その段階はもう通り過ぎていきます。早急に”南の兵隊”に連絡を取り次いでください。」

”南の兵隊”……つまり、それはジュゼツペが電話一本で間接的に動かせる武装勢力を指す。

たしかにヴェネトが彼らを必要とする理由を説明すれば、兵隊達は是非もなく従うことだろう。

それは兵隊達にとっても利益になる話だからだ。

反対にヴェネトも彼らが必要であることに疑いの余地もない。

もし方が一の事態になっても、ヴェネトは兵隊との関係を否定できる。

彼女は自分の計画に正規の兵力を用いるわけにはいかないから、これは殊更に重要だろう。

それに：ジュゼツペは自分が強力な正規戦力を扱えるまでに出世できた理由を自覚していた。

ジュゼツペ・パレンティは生粋のシチリア人で、兵隊達の大ボスとは古い仲である。ヴェネトがそれを見込んでいたとしても何も不思議には思わないし、ジュゼツペは仲の良い知人とヴェネトの両方を喜ばせる事ができるのだから当人に躊躇の余地はない。

だから先ほどの会話は、ただの承認作業に他ならなかった。

ジュゼッペは自らが居座るデスクの上の電話に手を伸ばし、受話器を取って幾つかの番号を打ち込んだ。

自らの要求が実行されるのを見ているヴェネトの前で電話の呼び出し音に耳を傾ける。

そうしてやった呼び出し相手が応答すると、ジュゼッペはまるで電話をかけた相手が目の前にいるかのように満面の笑みを浮かべた。

「やあ、トニー！ジュゼッペだ！…ああ、久しぶりだね。おかげで元気さ。奥さんはどうかな？…：…うんうん、今度ウチにでも来てくれ。極上の赤ワインが手に入ったから…：あはは！その通りだ、お宅のほどじゃないんだがね…」

ヴェネトは脚を組んでジュゼッペが愛想をふんだんに振り撒いた長つたらしい挨拶を終えるのを待った。

軍隊では単刀直入というのがベストなやり方だが、時としてそうはならない場合もある。

特にジュゼツペの友人に対してはそれが当てはまった。

挨拶は話題を様々な方向に飛ばしたが、最後には「トニー」の息子の進学先について
 のアドバイスで締め括られ、そして本題へと達する。

「…とここで、トニー。いつか北部のお嬢様スウェーデンの事を話したと思うんだが、覚えてるかね
 ？」

ヴェネトはジュゼツペが彼女の事を「お嬢様」と呼んだのを聞いて片眉を上げる。

サディアアのKANSENを率いる者としてそれなりの威厳を保持しているはずだが、
 ジュゼツペ・パレンティとその仲間内にとっては彼女もまた、ただの「お嬢様」という
 訳だろうか？

ジュゼツペにその気がないにしろ、ヴェネトは少しばかりプライドをくすぐられたよ
 うに感じる。

「そうだとも、トニー。彼女は君の望むモノを供給してくれるだろう。だから力を貸し
 てくれるね？……ああ、ああ、ありがとうトニー……もちろん、それも伝えておこう。そ
 れじゃ、朗報を待っていてくれ。」

浅黒い男はそう言つて電話を元の位置に戻す。

ジュゼッペの報告を聞かなくともヴェネトが全てを察することは容易だったので、彼女は立ち上がり、そして回れ右をした。

「ありがとうございます、ジュゼッペ。」

「どういたしまして。ところで……もちろん、私もとニーも、返礼を期待していますよ？」

「心配は不要ですよ。」

「ヴィットリオ・ヴェネトはジュゼッペの友人が”善きサマリア人”ではないことくらい承知している。」

彼らの欲するモノを与えれば、少なくとも南サディアの海運業者は致命的になりかねない業績の悪化を受けるだろう。

ただしヴェネトには彼らを犠牲にしてまで成し遂げなければならない計画があった。

ジュゼッペの執務室を後にしたヴェネトは再びAW109に乗り込んだ。

次にやることは決めてある。

「極東の”甥っ子”を誉めてやらねばならない。」

I

副業

チツタ・エナテール市内

栄えあるサディア帝国の中心たるこの町で、思わず2度見をしてしまうような美女と食事を摂っている冴えない中年のアジア人を見かけたなら、きっとそれが私だろう。

私の名前は『カツラギ』。

重桜海軍の士官にして、階級は中佐だ。

そしてテールブルの向かい側にいるのは私の妻。

明るめの茶髪に、素敵なきみ。

到底私にはふさわしくないように思えるかも知れないが、それでも彼女は私を受け入れてくれた。

彼女の名前は『ザラ』。

重桜の指揮官の一人がなぜサディアの街角でザラ級重巡洋艦のネームシップとランチを楽しんでいるかといえば、それにはちゃんと理由がある。

そもそも、それは私がサディアの駐在武官として派遣された経緯から話さねばならないだろう。

数年前から始まったセイレーンとの戦闘は、人類側に多大な犠牲を強いた。

奴らのチカラは強大で、いかに一等国の海上戦力を持つ重桜といえど苦戦は免れない状況だ。

当然のことながら優秀な海軍軍人は前線の陣頭指揮へと回されていく：つまるどころ、私はその時期に駐サディア大使館の駐在職員に選ばれたのは、私が少なくとも指揮能力に於いて平凡以下と見られていたからだろう。

たしかに私はたまたまサディア語を話す事ができたし、読めたし、書くこともできた。

ただし駐在職員に相応しい人間なら他にも腐るほどいる。

私は特に選ばれたわけでもなく、海軍部の人事リストの中から上位者を削り取った結果でしかない。

何のことはない、私の他に軍人は私よりサディア語もできるが軍人としての能力の方が秀でていたがために引き抜かれていったのだ。

平たくいえば、”戦時昇任”とでも言ってしまった方がいいだろうか？

ともかく、私はサディアに赴任した。

無論、ウキウキもウツキウキで。

セイレーンとの第一線に派遣されることもなく、尚且つ官費でエウロパに行けるとい
うのだから何を迷う事がある？

サディア、サディア、素晴らしきサディア。

せっかくのサディア赴任なのだ、ナポリを見ずして死ぬ理由もない。

私がザラと出会ったのは、赴任した最初の週くらいは旅行者気分を隠しておこうと大使館近くの美術館に向かった時だった。

個人的には重桜海軍の制服というのがどうにも気に食わない。

あの白い生地に汚れは目立つし、それに詰襟のせいで息苦しいのだ。

ともかく私はその日、致し方なしに嫌っている制服に身を包んで美術館へと向かった。

いつの日にかナポリを見物するにしろ、その前菜くらいはあったっていい。

ところがその道中で2人の若々しい別嬪さん2人とぶつかってしまった。

その内1人は手にピスタチオのジュエラートを持っていて、私の海軍制服の白地に緑の帯ができてしまった。

この日出会ったザラ級重巡洋艦姉妹のうち、私の制服をキャンバスにして砂糖のピスタチオのアートを拵えた方がザラだ。

「……………ねえ、あなた。デザートにジュエラートを頼んでもいいかしら？」

「……………うん？……………ああ、もちろんだとも、ザラ。ただし、今度ばかりは身の回りに気を付けて。」

「あつははは！あなた、まだあの事を根に持つてるの？」

「大変だったんだぞ？クリーニングに出してくれたのは良いが、君らの部屋のフレグランスな香りが制服に染みてしまつてね。着任早々女にだらしない男だと思われてしまふところだった。」

「あははははは！それは大変だったわね……………でも、こうして一緒になれたんだし。」

「そうだな。今思うと、怪我の功名”ってヤツかも。」

もし私が遙か昔の戦国大名なら、この”怪我”に褒美を目一杯与え、家老として重用するレベルの”功名”だ。

彼女とは、ピスタチオのジェラートと白い制服のお陰でその後何度もやりとりをする仲となった。

更にいえば、ザラのジェラートがもたらしたのはそれだけではない。

私は今、ザラの紹介された仕立屋で調達した特注品のスーツを着込んでいる。

この店の価格設定は上流階級に向けていたし、店の駐車場には我々がここまで使ってきたサディアの誇る高級車が止まっていた。

目の前にあるミラノ風のカツレツも素晴らしいが、通常、海軍のいち将校がこれだけの金周りを確保するのは考えられない。

理由を述べるとするならば、私は副業を行なっている。

とても稼ぎのある副業で、それも元はと言えばザラと知り合えたからこそできること。

昨日こうして海軍制服ではなくスーツという服装を選んだのは、その副業に関する仕事だからだ。

2番目のメインを食べ終えて、デザートとコーヒーを楽しんだ私達は店を出る。

駐車場に向かい、私よりもよほど運転が得意なザラが車のエンジンをかける頃にはそれまで微塵も感じていなかった緊張感が急に胃を圧迫し始めた。

そんな私を見たザラは、やはりクスクスと笑っている。

「緊張しすぎよ。あなたはキッチンと仕事をこなしたんだし…何を恐れる事があるのかしら？」

「そうは言っても緊張するさ。」 叔母様「に会うんだから。」

車はチツタ・エナテール随一のホテルへと向かっていく。

腕時計で時間を確認すると、我々はここまで時間に正確にスケジュールをこなす事ができていた。

駐車場に車を止めると、我々はホテルへと入って行き、フロントでアポイントメントを取ってからスイートルームへと向かう。

エレベーターを最上階で降りてフロントに案内された通りに直進すると、その扉の両脇でスーツ姿の屈強な男達に出迎えられた。

私はそのうちの一人に、可能な限り落ち着いて話しかける。

「どうも、こんにちは。」叔母様”に、カツラギが会いにきたとお伝え願えますか？」
「…身分証を」

IDカードとボディチェックを受け、我々はようやくとスイートルームに通される。黒スーツのボディガードに引き続いていくと、そこに”叔母様”がいらつしやった。美しいプラチナブロンドに、豊満なスタイル。

上品という言葉では表現しきれないほどの物腰の中に、たしかに覇気というものを漂わせた女性……彼女がKANSENで、その名は…

「お久しぶりです、”叔母様”」

「はあ。その呼び方はやめなさい。」

”叔母様”…ヴィットリオ・ヴェネトがため息混じりにそう言って手を振った。

我々を案内してきたボディガードは部屋から出て行き、ついで”叔母様”の近くにいた恰幅の良い男がヴェネトに尋ねる。

「僕も…席を外した方がいいかな？」

「そうですね、ポンペオ。あなたは海軍の軍人としては優秀でも政治には無頓着でしょうから。」

「おやおや、これは手厳しい。」

「あなたのことは愛してはいますが、だからこそあまり巻き込みたくはありません。」

「分かったよ、ヴェネト。それじゃ私は退散しよう。」

ヴィットリオ・ヴェネトの指揮官、ポンペオ・カルルツチ海軍中將が部屋から退場すると、我々は彼女の対面のソファへと促される。

「…さて、カツラギさん。重桜での作戦は上手くやってくれたようですね。」

「光荣です、”叔母様”。」

しまった、と思った。

ついいつも癖でまた彼女のことを”叔母様”と呼んでしまう。

しかしながら彼女も彼女でこのことについては慣れてしまっているようで、少しため

息をついただけで本題を続けた。

「あなたのおかげで海軍部統帥派の首領を処理する事ができました。既にこちらの情報筋では、皇室派との緊張が高まっていることを確認しています。」

「統帥派を構成するのは軍の中堅将校連中です。奴らは今回の件を皇室派による謀殺だと決めつけることでしよう。人事を無理矢理にでも変更して、皇室派の要職者を下野させる腹積りか。」

「皇室派は更にその先を狙う……ここまでは私の狙い通りです。ただ問題は……」

「そうです、叔母様。この先が問題となります。統帥派と皇室派の衝突はいずれ表立ってくるのかと思います。我々がそれを先回りして潰そうというのなら、直接に介入できる戦力が必要です。」

「それについては心配なく。既にジユゼツペと話をつけています。」

「パレンティ大佐と？」

「ええ。あなたはもうサディア大使館の駐在職員ではなく、海軍部の中央にいる。作戦の指揮を取るには最適な位置かと思いませんが？」

私はギョツとして叔母様の方に顔を向ける。

ヴェネット” 叔母様” はあつけらかんとしていらつしやるが、彼女のいう通りにするならば、私は火薬庫の中を松明を掲げながら行くことになる。

「…叔母様、しかし」

「ジユゼツペの兵隊を動かすためには現場で指揮する人間が必要です。彼を動かしても、私が出向いても、どのみち重桜当局に目をつけられてしまおうから。」

「つまり、私たちの手札で重桜の内部に潜り込んでいるのは私の指揮官だけ…そういうことね？」

「そうです、ザラ。カツラギ中佐の立場なら重桜軍部内の情報が…それも正確な機密情報迅速に入手できると踏んでいます。そしてあなたにはそれを成し遂げる能力がある。」

「叔母様、買い被り過ぎですよ。私はそんな…」

「もちろん、あなたがどうしても固辞したいのであれば構いません。仮にも私たちの仲間と結ばれた指揮官を追い出すような真似もしないと約束しましょう。…これは…あなたの副業の依頼主として命令しているのではなく、ザラとあなたの関係を取り持った立場にある者として”お願い”しているのです。それに、これは必ず重桜にも利益をもたらすでしょう。」

私はとびきり酸味の強い梅干しをかまされたかのような顔をしているに違いない。叔母様のご依頼を成し遂げるとすれば私はとびきり高いリスクを抱えることになる。それに、別に重桜がどうなるうが…正直言つてどうつてことはない。

あの国と国民はどのみち終わつてゐる。

セイレーンとの戦いが、重桜国民を浮き足立たせてしまつていた。

彼らは今やユニオンすら敵でなしと豪語する有様なからだから。

しかし隣にいるザラが優しく私の手を握つてきたので、私は引き返せる最後の地点をあつという間に…そしてあまりに軽やかに通り過ぎてしまふ。

そう、これはどちらかというところザラや叔母様のサディアにとつて重大な作戦なのだ。

サディアが助かれば、もしかすると重桜も助かり、私達はまた平穏な日々を楽しめるかもしれない。

その強力な誘惑は、リスクを傍へと追いやってしまふ。

「…かしこまりました、叔母様。」

「良く決断してくださいました。ただ今より、私たちの作戦の極東方面での指揮権をあなたに任せます。連絡はサディア大使館の者を通じて行いますが、間違つても直接出向

くことはないように。」

「はい、叔母様」

「……………あなたは重桜の首都のど真ん中で、海軍部の要人を見事に処理したのです。私
の見立てが間違っていないことを、どうか証明してください。」

「ええ、叔母様。ご期待には必ず答えます。」

ザラのためにも、そして自分のためにも、私に選択肢はない。

叔母様のご期待に応えるためにも、私はその日の夜には重桜行きの飛行機に乗って
いた。

中立地帯

重桜

海軍部

海軍部の喫煙所では2人の将官が周囲に気を配りながら話をしている。

それはついこの前に起こったある事件のことで、2人は互いに同じ側に立っていることを知っているからこそ、それを話の種にできた。

「……………長官は皇室派に殺された、それは間違いない。白昼堂々長官を暗殺した下手人は天誅」と言っていたそうだ。…皇室派が好んで使う言葉さ。」

「俺はまだわからんと思うよ。」

「なぜ？」

「皇室派連中がああいったやり方をするとは思えない。凶器はユニオン製の安物拳銃で、つまりは誰が関与したか分からんような代物だ。皇室派がやったら、あの若手達は自ら名乗りを挙げただろう。あんな…闇討ちのような、汚い真似はせん。」

「どうだか。我々が連中を追い詰めすぎたのかもしれない。手段を選ばなくなったとか…どちらにせよ尻尾は掴んだ。」

「武器の出所が割れたのか？」

「ああ。陸軍の下士官が銃砲店から購入した。酒癖の悪い男で、居酒屋に入り浸っていた時に無くしたらしい。」

「もしそれが本当だとしたら、相当にだらしない奴だ。陸軍の下士官なら管轄はもちろん陸軍憲兵だな…我々は手を出せん。」

「つまり…こちらは打つ手なしかい？」

「どうだろう…賭けてみるかい、ヤマウチ君？俺は皇室派以外の人間に賭けるよ。」

「後悔するなよ、モウリ君。それじゃ、私は皇室派に賭ける。…結果はどうせ見え透いて

るがね。」

海軍統帥派の重鎮、モウリ海軍准将は友と別れて自分の職場へと向かう。

長官は統帥派のなかでも人望の厚い軍人で、故にこの暗殺には憤怒と落胆の両方の声
が上がっていた。

彼ら統帥派は重桜の現状を顧みて、国力の全体的な増強をその主眼として設定してい
た。

セイレーンとの戦いの終焉が見え始めている現在、大洋を隔てるユニオンと覇権争い
に至ることは火を見るより明らかだ。

だから彼らはその衝突に備える準備を行うべきだと考えている。

対して皇室派が掲げるのは長引くセイレーンとの戦争で疲弊した国民の救済であり、
彼個人として同情はすれど指示できるものではない。

国民あつての国家か、国家あつての国民か。

情熱激る青年が前者に走るの若気の至りとして、後者を重視すべき中堅が許して良い
ものではない。

これが現在、陸海問わず重桜軍部を二分している問題である。

さて、事は何事にも例外というものがあろう。

この派閥争いにおいても勿論例外はある。

統帥派のモウリとしては、最早回避不能となった皇室派との直接対立の前にできる限り味方を増やしておきたい。

故にそのための工作を行うべく、彼は様々なチャンネルを用意していた。

早速自身の職場に戻った彼は、そのために弱身を握っておいた部下は連絡を回す。

「……………ああ、ヤツメ大佐。例の奴はまだ落ちないか? ……言い訳を聞いてるんじゃない。私達は先に地歩を固めておく必要がある。…ああ、そうだ。急ぎたまえ。」

……………

「指揮官、私…あなたのことがとても気になっていました。」
「気持ちありがたいが、そこまでしておけ。」

私は目の前で1人のKANSENが上衣をはだけさせた時、とてつもない嫌悪感を覚えた。

彼女の名前は『愛宕』。

私の上官から直接派遣された”応援要員”である。

美人なのは否定しないし、スタイルも良い。

だが私には心に決めた妻がいる。

それにこのKANSENがどうしてこんな真似をするのかもよく理解していた。

だから視線を彼女の方へは向けずに書類に没頭する。

心の内でザラに早く戻るように念じながら。

「お願いします、指揮官…あなたに尽くす機会をお与えください。」

「十分尽くしてもらってる。ご苦労、黙って退出したまえ。」

「そんな…私はただあなたを喜ばせたくて」

完全に上衣をはだけて、魅惑的な足取りでこちらに向かう愛宕。

しかし彼女は私の机の下から聞こえた「チャキツ」という金属音によって足を止める。

そんな彼女の方に初めて向き直りながら、私は机の下に隠していたM92拳銃を腰だめに構えて見せた。

「君の感想なんてどうでも良いし、私は決して不貞はせん。それに…失礼なんだが猫アレルギーなんでね。さっさと帰ってくれないか？」

9ミリ口径の自動拳銃なんて、KANSENからすれば豆鉄砲に過ぎないことくらい重々に知っている。

それでもこのサディア製の拳銃は私の意志を表示するには十分に効果のある代物だろう。

愛宕は上官による評定通り優秀なKANSENのようだった。

一瞬キツとした表情になると、すぐにそれを隠して上衣を直して部屋から出ていく。

入れ違いに入ってきた秘書艦のザラは、既に何事が起きたのかを察していた。

「…まさかとは思うけど、あなた彼女の誘いに乗ったわけじゃないでしょう?」
「言うまでもない。私は君一筋き。…彼女への返事はコレ。」

装填した9ミリの拳銃を机の上に置いてみせる。

ザラは安心したような表情を浮かべながらも謝意を口にした。

「疑ってごめんなさい。ただ…何というか」

「あの女が魅力的?…彼女には悪いが、私の好みからは外れるよ。私は君のようなよく笑う女性が好きだし、愛宕の笑顔は見たことがない。」

「うふふふ…そう…そう…それなら安心できそうね。」

「悪いんだがドアを閉めて鍵を掛けてくれ。例の件について話し合わねばならない。」

ザラが執務室の大きなドアを閉じて、その鍵をかける。

執務室と言っても、ここは鎮守府のような艦艇拠点ではないが。

ここは海軍部の中にある部屋の一室で、私はここで海軍の後方関連に関して携わる立

場にいる。

無論のこと、この執務室に入る前には十二分に調査を行なって盗聴器の類がないことを確認しているが、念のためにユニオン製の巨大なスピーカーから環境雑音を流してザラとの会話に移った。

「…叔母様の兵隊は何人入国できた？」

「あなたの協力があつたおかげで、最初の30名が円滑に入国できたわ。軍事研修名目だったから、武器装備もちゃんと持ち込めた。」

「それは大変結構。何か問題はなかったかな？」

「問題がないこと自体が問題じゃないかしら？」

「というと？」

「あなたの上官。ヤツメ大佐はあまりに協力的過ぎる。何か代償を求めているのではな
くして？」

ザラの言いたい事は十分に分かった。

ヤツメ大佐…私の直接の上官にして、あの愛宕の指揮官でもある。

青年将校どころか年端もいかない少年に過ぎない人間が、高級将校の階級章をつけて

KANSENを率いているのには理由がある。

重桜海軍の人材不足は未成年者を強力な兵器の指揮に充てねばならぬほど深刻なのだ。

最もこの手の問題は重桜に限った問題でもない。

諸外国においてもKANSEN指揮に才能のある少年少女が高級将校の位を授かる事は今時珍しくもないのだ。

しかしながら私のような人間からすると彼らのような天才の指揮下に入るのはあまりにも面白くない事実だし、更には愛宕で色仕掛けを仕込んでくる辺りは嫌悪感すら催してくる。

たしかに、私が叔母様の注文に円滑に応えるためにはあの少年の協力が不可欠になってくるのは認めざるを得ない。

私の階級と役職では何らかの行動の主体になる事はできても認可を与える立場にはないからだ。

認可にはヤツメ大佐のような立場の認可が必要になる。

サディア海軍将校数名の重桜留学とその随伴員達の用立ては、ヤツメのあまり深い思慮のない、軽はずみとも取れるような賛同がなければ難易度を増していた事だろう。

しかしながら、だからこそ注意しなければならない。

「ここまで奴が私を全面的に支援するのに、何か腹つもりが無い方がおかしいのだから。」

そして、私にはその心当たりが有り余るほどある。

「大佐は統帥派だ。きつと…私のことを統帥派閥に加えたくて仕方がないんだろう。」

「あなたは現時点で統帥派でも皇室派でもない、そうよね？」

「ああ。そして、今時そんな奴は希少人種だ。」

私は表向きにはどちらでもないし、本心でもどちらでもない。統帥派のファシストも皇室派のポピュリストもクソ喰らえ。ただ…渋り続けるのもよろしくなろう。あのクソガキにも見返りをやらねばならん。」

「それじゃ…」表向き」の路線を変えるわけね。統帥派に擦り寄って、何か引き出せないか探ってみるとか。」

「うん、だけど最初から何もかも与えるつもりはない。…」考えてみる”と言うだけでも、この時期なら関心を買えるだろう。どのみち私が本腰を入れることもない。統帥派も皇室派も仲良く喧嘩して潰しあってくれれば良い。それが…私の、そして叔母様の最大の望みだよ。」

若気の至り

愛宕はベッドの上で起き上がると、同じ床で寝ていた少年の耳元に顔を近づける。とても優しい表情を浮かべると、その顔と同じくらい優しいに語りかけた。

「朝よ、指揮官。起きてちようだい？」

「……………ん……………もう少しだけ……………」

「あらら、相変わらず甘えん坊さんねえ。…分かった、先に朝ご飯の準備をしておくわ。」

彼女は自らの指揮官に布団を掛け直すと、1人ベッドから降りて着替え始める。

パジャマを脱いでその豊満な肢体をKANSENとしての制服に包み変えた。

ふと、脳裏に浮かぶのは昨日の出来事。

『失礼なんだが猫アレルギーなんでね。…さっさと帰ってくれないか?』

あの中佐は彼女の誘いに載るどころか嫌悪感すら隠そうとしなかった。

彼女自身とて自分の美貌には自信がある。

それでもあの男ははなから取り合おうともしなかったのだ。

「……………指揮官殿に無用な心労を強いるな、愛宕。」

凜とした声に思わず振り返る愛宕。

声の主は彼女の姉妹艦たる『高雄』で、昨日の件は愛宕の単独で行ったにも関わらずその大凡を既に知っているようだった。

「…何のことかしら、高雄ちゃん。」

「とぼけても無駄だ。指揮官殿はお前が何をしたか既に察している。…そうやって相手を籠絡したのは一度や二度ではないのだからな。」

「……………」

「お前は既に指揮官殿と結ばれている。もうこんな事はやめた方が良い。」

「…だけど、指揮官の後ろ盾だった長官を失った今…彼が准将の要求に添えなければど

うなるかはあなたも良く理解しているでしょう？」

「……………」

今度は高雄が押し黙る番だった。

いくら能力重視の戦時体制とはいえ、未だ青年の域にも達していない子供に命令されるといのは職業軍人にとって愉快とは言えない事であろう。

ナツメ大佐はKANSEN指揮に天賦の才こそあれ影で陰湿な扱いを受けてもおかしくない立場にあった：現に直下の部下は陰で彼を『クソガキ』と呼んでいる。

この前皇室派と見られる不埒な輩に暗殺された海軍長官は大変な人格者で、この若年の指揮官を守るために色々と手を回してくれていた。

その年代で愛宕と結ばれるという、前代未聞の騒ぎを静めてくれたのも長官である。長官は厳密には統帥派でも皇室派でもなかった。

ただし統帥派に近いと言う噂があり、実際にも統帥派連中からはその中心として担がれていたのだ。

本人は国力増強を重視しつつも、皇室派の若手が願う国民救済にも理解を十分に示していて、何度も青年将校グループと談義の機会すら設けていた。

ところが…恐らくは…その青年将校グループのうちの誰かに長官が殺された。

暗殺者が何者であるにしろ、統帥派と皇室派の対立はこれで不可避のものとなった。統帥派の中心人物は海軍部のモウリ准将で、すなわちヤツメ大佐の直属の上司である。

准将は今度は副長官を担ぎ上げ、まだ統帥派と皇室派のどちらにも参加していない指揮官達を自身の側に引き込もうと躍起になっていた。

愛宕の指揮官たるヤツメ大佐に大きな圧力を掛けているのは、きっとそのためである。

元々准将と愛宕の指揮官の関係は良好とは言い難かった。

長官の暗殺事件の後、准将は大佐に対して、もし期待に添えなければKANSENを取り上げた上で更迭するという脅しに近い文句を押し付けている。

愛宕はそれ以来塞ぎ込むようになってしまった指揮官を心から心配していた。

「准将の要求にしろ、何か他に手はあるはず。」

「でも……もし失敗したら」

「それで指揮官殿が更に塞ぎ込んだらどうする!？」

「……………」

「……愛宕、お主人ではない。あの中佐を籠絡するにせよ、拙者も手を貸そう。だが、方

法はよく吟味せねばならぬ。」

高雄の言葉に反省しつつ、愛宕は愛してやまない指揮官の方を見た。

”この子の安息を保つためなら”

愛宕は何でもするつもりだったし、邪魔者の排除も視野に入れている。

そして今のところその邪魔者とは、カツラギ中佐だった。

.....

愛宕が私の執務室に入ってきた時、我々は朝食中だった。

焼きたてのブリオッシュに濃いめのエスプレッソ、チョコレートスプレッドを塗った

くつたビスケットに加えて、私の頼みでキノコたっぷりサラダも加わっている。

この朝食を拵えてくれたのは愛するザラで、ポーラも彼女を手伝ってくれていた。

そんなポーラが豊満な臀部に装着していたホルスターから、突然タンフォリオ製の9ミリ拳銃を手を取ったことにギョツとしたのはちようどその時。

我々の朝食会場に上官の”駒”がやってきた時だった。

「…おはようございます、中佐。」

愛宕は昨日のことなどなかったかのように振る舞っていたが、ザラもポーラも私から詳細を聞いているだけに彼女に対して敵対的な態度を崩さない。

私も出来るだけ表情を変えることなく腰のホルスターに手を伸ばし、ベレッタの拳銃をそつと引き抜いた。

昨日、私ははつきりと彼女に拒絶の意思と共に「帰ってくれ」と伝えている。

それが平然とした様子で私の目の前に現れたということは、下手をすれば私に害意をもっている可能性があるということ。

隣にあるキッチンのおーブンから焼きたてのブリオツシュを取り出してきたザラも私とポーラのいるテーブルの手前で凍りつき、続いてブリオツシュを置いてから元いた

キツチンの方へと引き返していく。

オーブンの下の隠しスペースには短銃身のベネリM3があり、まもなくザラはそれを手に戻ってくる。

我々は即座に取り得るだけの防御体制を整えたわけだが、愛宕の方は何らの動揺もしていない。

少し冷やややかな笑みさえ向けていて、我々は自然と身構えたわけだが、しかし彼女は我々の想像とは異なり、謝意を口にした。

「昨日は申し訳ありませんでした、カツラギ中佐。少しばかり…思い上がった真似をしてみましたようです。」

彼女はもう私のことを「指揮官」とは呼ばずに階級で呼んでいる。

やはり私の推測は大筋あっていたようで、あの行動は彼女なりにヤツメ大佐に尽くそうとした帰結に違いない。

まだ勤務も始まっていない時間に、アポイントメントもなく、あんな事をした後に私の妻の前に現れるなど無礼も無礼の典型のような行為だが。

しかし彼女には恐らく彼女なりの思惑がある。

一つは示威行動。

個人的にはあんな真似をしてよくも、と思いたくなるが相手はあくまで上官の配下である。

彼女は自らの失態を認めつつも、改めて大佐の権威を振りかざすという冒険的な挑戦を挑んでいるに違いない。

何故なら二つ目の理由から、彼女は何が何でも私に対する権威を見せておかねばならないからだ。

その二つ目の理由とは、おそらく私に何らかの説得を試みる意図があること。

昨日の軽薄な行動は元々彼女なりの”説得”だったし、何らの躊躇もなかったところを見るにあの方法を用いたのはこれが初めてではないはずだ。

大佐の権威を示すだけで私を思うように動かすなら、それはちゃんと勤務時間中に私のところに来て”命令”を伝えるだけでいい話。

ところが彼女は朝のエスプレッソがまだ熱いような時間帯に来て、直に対応を望んでいる。

それはきつと、彼女が色仕掛けに走った理由とも通ずるところがあるはずだ。

要するに、彼女はこの”説得”に於いて大佐の関与を伏せておきたい。

「………すまないが…ザラ、ポーラ、席を外してくれないか？」

「なっ、正気なの指揮官!?この女が何をしたのか私たちは知って」

「ポーラ、今は指揮官の言う通りにしましょう。…あなた。私達はキッチンで待つてい
るけれど、もし何か少しでも異変を嗅ぎ取ったらすぐに突入するから…そこだけは承
しておいて。」

「ありがとう、ザラ。それにポーラも。」

2人が執務室から出て行って、部屋には私と愛宕だけが残される。

私はまだ何も載っていない皿を手にとって、その上にブリオツシュを乗せて彼女の方
へ差し出した。

「こんな時間に来たんだ。朝食もまだだろうか？」

「どうかお気遣いなく、中佐。」

毅然とした態度を取っているが、私は愛宕の中に一種の迷いがあることを見て取っ
た。

嘘をつけ。

お前は朝食なんて取ってない。

だが私からブリオツシユを取らないのはきつと醜態を晒したくない、なんて理由じゃないんだろう。

お前はあんな真似をしておいて、しかし”貞操”を保っていたいんだ。

彼女はここに来る前に、愛する指揮官のために朝食を拵えてきたはずだ。

ところが、恐らくは最近には彼と共に朝食を取れていない。

いつも彼女は朝早くから出勤していて、大抵は私が朝食を摂り終えて身支度を済ませた頃にはやってくる。

きつと寝ぼけ眼の私から何か失言が飛び出さないか狙っていたに違いない。

ザラのエスプレッソのおかげでその可能性はゼロに近いが、彼女が知る由もないのだから。

何はともあれ私の善意は退けられた。

だから遠慮なく彼女に差し出したブリオツシユを手元に戻して、同じく机の上にあるチョコレートスプレッドを塗りつける。

しかしそれを口にする前に大切な事を思い出して、キノコのサラダを手前に寄せた。

まずはサラダを食べて、ブリオツシユとビスケットはその次にする。

甘いものたっぷりのサティア式朝食に対する、私なりの最低限の健康法でもあった。

「……………それで。君は私を説得に来たんだろう?」

「分かりますか?」

「ああ。昨日あんな事をしたのは大佐の関与を隠しつつ、私に何かしらの行動を迫りた
いからだ。」

「……………」

「あんな事をする前に、一度こうやってくれれば彼女達の機嫌も損ねずに済んだと思
うがね。」

キノコのサラダを食べ終わり、再びブリオツシュに手をつける。

バターをふんだんに使ったふんわりとした生地を裂きながら、もはや愛宕に目もくれ
ずに食べ始めた。

彼女は先ほどから直立不動で、その真剣な様子が良く伝わる。

「…率直に申し上げます、中佐。指揮官…ヤツメ大佐は同志を求めています。」

「同志?…おかしな事を言う。我々は既に重桜海軍という同志だ。共に重桜に尽くす同

志だと言うのに、今更忠誠を再確認するまでもないだろう。」

「中佐もご存じのはず。今や重桜海軍は一つではありません。現実的な思慮を重ねる側と、無謀なまでに希望に縋る側に別れています。」

「随分と辛辣な物言いだな。国民の救済は軍部の義務ではないと？」

「彼らの信ずるやり方では不可能なのです、中佐！サディア帰りのあなたが、それに気づかないはずもない！」

「…落ち着きたまえ、何も私は“若気の至り”に肩入れをするつもりはない。」

ブリオツシユを食べ終えて、エスプレッソを一口含む。

途轍もなく濃く感じるが、コレが一気に目を冴えさせてくれる…ただし用便が近くなりやすいという欠点もある。

次いでビスケットを摘みながら、彼女に改めて視線を向けた。

「……………大佐のお考えは私といえどよく理解しているつもりだ。現実的に見れば皇室派連中の若造どもは御伽噺の住人でしかない。」

「……………では！」

「ただ、忘れてはならんよ？先も言ったが、彼らもまた重桜海軍の同胞なのだ。”若気の

至り”なら誰にでも経験はある。大切なのはそれを正してやること。とはいえ……………」

「……………」

「長官の件は誠に残念だった。」

愛宕の瞳孔が開くのが遠目にもよく分かる。

一体どれだけ感情を隠すのが下手くそなんだろうか。

「……………まだどちらとも言えんが、少なくとも私はもう皇室派には同情はできんな。奴らは超えてはならん線を越えた。私は統帥派の言う事に賛同することはあっても、もう皇室派連中に賛同することはないだろう……………少なくとも。」

「賢明なご判断です、中佐。大佐もあなたの判断を高く評価するかと。」

「そうか、それは嬉しいね。…さて、愛宕。今日の業務にはもう”応援要員”は必要ない。」

「しかし…」

「良いんだ、明日また出直してきてくれ。私は君の考えに納得したが、キッチンにいる彼女達を説得するには時間がかかる。何かの拍子に散弾銃で撃たれんとも限らん。」

「……………」

「そう暗い顔をするな。彼女達も陰湿じゃない。明日の朝には曲げたヘソを治してさ。……ただ、今日のところは、大佐の元にてくれ。」

「お氣遣い感謝致します、中佐。それでは……お言葉に甘えましょう。」

やがて愛宕が出て行って、キッチンでザラとポォラが戻ってくる。

私は最後のビスケットを食べ終えてから、ニコチンガムを口に放り込んだ。

禁煙を始めてからかなり経つが、朝一番の離脱症状だけは未だコレに頼らざるを得ない。

「それで……上手くいったの？」

「ああ、ザラ。とりあえずは、上手くいったとも。」

もし仮にヤツメ大佐から皇室派の排除を命じられても、私は多分やらない。

連中は潰し合わせたいが、自分はその中に加わるつもりはないからだ。

でも、もし叔母様ワイットリオ・ヴェネトから要求されれば……私はいちにもなくやるだろう。

内憂外患

黒海洋上

「クソ！3隻目のフリゲートがやられたぞ！」

「艦長、護衛が全滅しました！KANSENの援軍はまだですか!？」

「サディアア帝国船籍の商船の操舵室では、副船長が船長に悲鳴に近い問いかけを行って

いた。

船長は通信士の方へと振り返ると、彼に何か命ずることもなく、ただその方向へと向かっていく。

次いで通信士を席から退かせると、自らヘッドセットを頭に掛ける。

「こちら商船、ヴェネツィア！護衛のフリゲートが全滅した！救援はまだか！」

『ヴェネツィア、こちらはサディア帝国KANSENのドゥーカ・デッリ・アブルツィだ。全速でそちらに向かっているが、まだ時間がかかる。どうにか持ち堪えられないか？』

「護衛は全滅したし、こっちは積荷を満杯に積んだ貨物船だぞ！無茶を言うな！！」

実際サディア帝国海軍のフリゲート艦を沈めた時点で、セイレーンの艦隊は“ヴェネツィア”の正確な位置を掴んでいると見て間違いない。

つまり船長にとっては一刻の猶予もないわけだ。

そんな“ヴェネツィア”の無線に、別言語の無線が混信する。

『商船“ヴェネツィア”、こちらは北方連合所属KANSENのチャパエフよ！そちら

の概ねの位置は把握している、すぐに救助に向かえるわ!」

ああ! ありがたい!

船長はそう思ったが、しかしこの女神のようなKANSENに救助を求める前に新しい規則に則らなければならない。

大変煩わしいことこの上ない無線機の操作を行なつて、船長は衛星通信によりサディア帝国海軍に連絡を取る。

「本部、本部、こちら」ヴェネツィア! 北方連合の艦隊から救助の申し出があつた。詳細座標を送る許可をいただきたい!」

『「ヴェネツィア」、北方連合の艦隊に救助を求めることは許さない。本国の艦隊が到着するまで待て。』

「しかし! 新規則上においても緊急時は北方連合との接触が認められているはずです!」

『それはこちらの艦隊が派遣できない場合に限られる。貴船舶には現在当海軍のKANSENを向かわせている。到着まで待たれたい。』

「冗談じゃない! セイレーンは目と鼻の先にまで迫つてるんだぞ!」

『北方連合との許可なき接触は反逆罪と見做す。通信は以上だ。』

クソツタレどもが！

そう叫びたいのは山々だったが、船長はあくまで冷静でいるべきだし叫んだところで現状が良くなるわけでもない。

船長はヘッドセットを投げ捨てると双眼鏡を手にとって沈みゆくフリゲートの向こう側に見えるセイレーン艦隊の方を観察する。

敵の艦隊は徐々に距離を詰めており、船長が観察を始めてからいくつか後には早くも砲門を開いた。

セイレーンの砲弾は商船“ヴェネツィア”に複数の至近弾をもたらして、船長のいる操舵室は大きく揺れる。

「ここまじや船が持たん！総員脱出準備！」

「船長、ボートで砲弾の只中へ行けと仰るのですか!？」

「この船に満載された貨物と共に沈みたいかね!?!北方連合の連中を頼るわけにもいかん、万が一でも可能性がある方に賭ける！」

その時、今までよりももっと近い至近弾が着弾して”ヴェネツィア”は今度は船体ごと大きく揺れた。

セイレーン艦隊が照準の修正を行なっている証左だし、次は確実に当ててくる事だろう。

船長は船内の一斉放送装置までどうにか行つて、その送信機を手取る。

だがその送信ボタンを押して緊急脱出の指令を下そうとした矢先に、遠くの方で…しかも先ほどセイレーン艦隊の位置を確認した方角からとてつもなく大きな爆発音が聞こえた。

次いで衝撃波が”ヴェネツィア”の操舵室を震わせると、船長はようやく事態を理解する。

「…セイレーンがやられてる………一体誰がやった？」

サディア帝国海軍はまだ到着していないし、北方連合の申し出には返答していない。

もしや北方連合の連中が…連中らしくもないが…機転を効かしてくれたのか？

答えはそのどちらでもなかった。

やがて”ヴェネツィア”の直上を2機のJu87C爆撃機が通過する。

この鉄血製急降下爆撃機の存在が意味することはきつとひとつだけ。そしてその”意味”は商船の通信設備により証明された。

『アロー？アロ〜？…聞こえてますの？』

いつのまにか入っていた通信に、船長は慌ててヘッドセットを拾い上げて対応する。

「あ、ああ！こちら商船”ヴェネツィア”！貴艦が爆撃機の発進元か？」

『ええ！私は悪い子ですから、連絡を取るより先に行動しちゃいましたの♪』

「いやあ！助かった！一刻を争う事態だったから…非常に賢明な判断に感謝する！」

『えつ……あ、いや…そ、それは…ええつと…とりあえず、よろしくて。』

「貴艦の所属を確認させていただきたい…サディアに帰港し次第大使館を通じて御礼をさせていただきますかね。」

『お礼なんてそんな…わ、分かりましたわ。こちらは鉄血公国所属空母、エルベですわ♪どうぞお見知り置きを♪』

.....

チツタ・エテナール

首相はとんだヘマをやらかしたし、海軍はそれよりも大きなヘマをやらかした。ヴィットリオ・ヴェネトはもはや全てを投げ出したくなりながら、自身の執務机の上
に突っ伏している。

窓の外を眺めながら、昼過ぎの優雅な赤ワインを楽しむ『リットリオ』を見ていると、普段より余計に恨めしさが増してしまった。

「……あなたは気楽そうで良いですね、リットリオ」

「思い詰めても始まらないことを知っているだけだ。こんな誤算程度は想定の内のはずだろう？……ヴェネトラしくもない。」

「確かにそうですけど、元老院や皇帝は言うに及ばず海軍まで本格的に国の舵取りを投げ出そうと言うんですから……総旗艦としては嘆かわしい限りです。」

「鉄血はこれで貴重な前例を得た。セイレーンの攻撃によつて衰退したロイヤルやアイリスに代わつて、エウロパ大陸の海上通商の保護者として名乗り出るに十分な前例を。」

「これならまだ北方連合に助力していただいた方がマシでした。元老院も議会もますます全体主義者に乗っ取られます。」

セイレーンによる通商の破壊は、植民地が経済の小さくない一翼を担っていたロイヤルやアイリスのエウロパ大陸におけるヘゲモニーを後退させた。

「虎視眈々と」日の当たる場所を狙つてきた鉄血は、ここぞとばかりに勢力を増長させている。

人類共通の敵という存在を存分に利用して、彼らは新時代における重要な一員としての地位を固めてきたのだ。

セイレーンの活動によって得をしたのは、少なくともエウロパ大陸においては国際的地位を飛躍的に向上させた鉄血と、多くの犠牲を払いながらも巨大な工業力を入手した北方連合の2カ国だけだった。

「サディア帝国は例に漏れず、損をする側」に留まっている。

ロイヤルやアイリスが持っていた植民地を、サディアはほとんど持つていなかった。

これだけでも負担は大きいのに、地中海でもセイレーンの活動が見られるようになる。とサディアの本土自体が脅かされたのだ。

ヴィットリオ・ヴェネト達は死に物狂いでどうにか地中海の安全を確保した。

ロイヤルは自国の通商保護に手一杯だったし、アイリスに至っては分裂の兆候さえ見え始めている現在、サディアは独力で地中海の安全を確保し続ける必要がある。

現在「我らの海」は小康状態を保っているが、ヴェネト達やサディア海軍が地中海の外にある勢力圏にまで保護力を伸ばすのはもう不可能だった。

地中海と隣接する黒海ですらその例外ではなく、海軍はなけなしの戦力を投じて最大の努力を行っていたにも関わらず今回の事件は発生した。

商船「ヴェネツィア」を筆頭とする通商船隊の護衛はセイレーンの攻撃になすすべ

もなく撃沈されたのだ。

「ドゥーカ・テツリ・アブルツツイを責めるわけにはいきません。どんなKANSENでも彼女以上に急ぐことはできないでしょうから。」

「ああ。ヴェネトが不満を持っているのは海軍上層部の反応か？」

「ええ。上層部は“ヴェネツィア”の船長に、北方連合からの救援の申し出を断らせた。愚かしいことに、自国の通商船の安全よりも政治を優先したのです。」

「その原因は硬直した軍組織体系か、それとも政治的な干渉か。」

「どちらだと思えます？…私はきつと後者かと。仮にも上層部まで上り詰めるような人間なら、いくら海軍が硬直した体制であつても神頼みなんてしないはず。全体主義は間違いなく海軍の上層部まで浸透しています。恐らく担当者は船隊の位置を鉄血側に流していたのでしょう。」

「エルベが付近にいたのは全くの偶然かもしれないが、救援のタイミングを踏まえると確かに不自然が過ぎるな。その推測はあながち間違っていないだろう。」

「それを偶然のように見せかけることによつて、全体主義者達は彼らの同盟者たる鉄血こそサディアス通商の保護者だと海運業界に刷り込むことに成功した。…はあ………してやられました。サディアス経済における海運業のシェアは決して小さくありません。」

「議会には全体主義者が増えるだろうな。元老院も皇帝もますます奴ら寄りになる。」

「無理な事とは理解していましたが：同時にこれは最後の希望でもありました。海軍が冷静でいられれば、いずれ国内の全体主義には歯止めが掛かると。」

「そんなものは願望に過ぎないし、願望に頼るのは愚か者のする事だ。だからあの男を使っているんだろう?」

「……………ふはあ…本当は奥の手だったのですよ?」

ヴェネトはようやく机から起き上がって、少々乱れてしまった衣服を整える。

そうして改めてリットリオの方を向き、”総旗艦”として彼女に命じた。

「リットリオ、あなたはビスマルクと会ってきてください。彼らは”下腹部”を固める必要がある以上、あなたを歓迎するはずです。」

「ヴェネトの指示とあらば喜んで従おう。：重桜の方はどうする?」

「いつも通り、内政は私、外政はあなたが対応する方が良いかと。あなたはあなたの任務に集中してください。」